

課題管理実施報告書

報告日：09年 11月 5日

プログラム	アジア科学技術の戦略的推進
課題名	アジア分析化学ネットワークの形成
実施日	2008年9月26日(土)
場所	北海道大学高等教育機能開発総合センター
形式	一般公開 (シンポジウム)・セミナー・講演会・ワークショップ・その他 ( ) 展示物：有 (機器・設備 パネル ビデオ上映 (体験型) (その他 (web HP))) 無
対象者	(一般) 学生 (中学・高校・(大学)) その他 ( )
来場者	人数：80名、(内訳 外国人15名、日本人 65名 )
周知方法	新聞 雑誌 (学会誌) メディア取材 プレスリリース HP、(メール発信) その他 ( )
実施者	○実施取り纏め者を記載 主催団体代表：中村 洋 (日本分析化学会会長、東京理科大学教授) 世話人：(代表) 渡會 仁 (大阪大学教授)、今坂藤太郎 (九州大学教授)、升島 努 (広島大学教授)、脇田久伸 (福岡大学教授)
内容	○実施内容を具体的に記載 アジアの10の国および地域と日本から第一線級の11名の講師が、各国の大学の分析化学の教育の現状と研究テーマについて講演し、討論を行った。日本分析化学会第58年会の会場で開催したことから、聴衆は延べ約80名が参加して熱心に討論を行った。案内のピラとプログラムを含む要旨集は年会の参加者約1500名全員に配布した。
効果、問題点、今後の展望と課題	○実施した効果を具体的に記載 講演に招待したアジアの10名の講師は、アジア分析化学ネットワークの必要性を強調し、今回の教育を主体としたシンポジウムの意義を高く評価した。特に、アジア各国で利用されている分析化学の教科書の実情は、いずれの国でも母国語の教科書が望まれているが、今回それが供給可能な国と母国語の教科書が整備されていない国が明らかになった。教育は母国語で行うことが効果的であり、一方でコミュニケーションのためには英語が必要であることはいずれの国でも認識されていることである。また、学生実験の設備の面でも国により格差が大きいことが明らかになった。大学の高等教育において、アジア諸国の連携が今後極めて重要である。学部教育においては、ある程度のレベルまではアジアの国々において目標が達成されているが、大学院教育は、研究を伴うことから、設備面での格差が大きいために、望ましい教育が実施されていない国もある。大学院教育について国を越えて協力するために、「東アジア大学院大学」のような構想が必要と思われる。大学教育における協力の必要性が共通に認識できたことが今回の最大の成果である。また、今後のこのような活動を支援するためのインターネット版のアジア分析化学ネットワークが始動したことも、具体的成果の一つである。次回のシンポジウムを、マレーシアのSoon博士と南京大学および日本との共同で、2011年に南京で開催することとした。 ○ 実施上の問題点を具体的に記載 シンポジウムに招待する日程が短かったため、議論を深める時間的余裕がなかった。インターネット上でのネットワークHP制作の作業が遅れた。 ○ 今後のコミュニティ形成に向けての展望と課題を具体的に記載 ネットワークの形成には、実際に顔を合わせて話し合うシンポジウムの開催とともに、より多くの人に参加できるインターネットの利用が欠かせない。ネットワークに参加のメンバーの検索HPの設置も含めてJSPSで支援していただけるとよい。
反省事項	○ 上記事項に関する反省点を記載 シンポジウムの開催日の前後の一日にエクスカージョンなどを企画し、それを利用して交流を深める時間を取るのが望ましかったと思われる。 ○ 他の実施者に参考となる事項を中心に記載 国際的ネットワークの形成には、準備作業として、個々の国を訪問して、キーパーソンにあたる人と知り合いになっておくことが重要である。
特記事項	○気づき事項、要望等を記載

	<p>今回のネットワーク形成の準備活動として、クアラルンプールのアジア分析科学会議 (ASIANALYSIS) においてワークショップを開催したこと、その国際諮問委員会で公式に本ネットワークの開始を承認していただいたことが、その後の札幌でのシンポジウムの成功に繋がった。そのような準備作業の費用についても J S P S より支援をいただくとありがたかった。ネットワーク形成作業は、立ち上げよりも継続・発展が難しいと思われる。継続するには、複数の国がローテーション的に世話をする等の仕掛けが必要と思われる。本事業の場合、2年毎に開催されるASIANALYSISとの共同主催であることが継続への挺子となると期待している。インターネット版のネットワークにおいても、立ち上げ後の発展継続のための方策が重要である。</p>
--	---